

電気電子工学委員会(第 26 期・第7回)

議事要旨

- I. 日時: 令和6年4月 24 日(水) 14:00~16:20
- II. 会場: 日本学術会議6階会議室6-C(1)
- III. 出席者: 大橋副委員長、佐古委員、三瓶委員長、関谷委員、田中幹事、中川幹事、中村委員(50 音順)
- IV. 審議事項

審議に先立ち、参加者の自己紹介が行われた。(資料1 参照)

(1) 第 26 期におけるこれまでの議事要旨の確認

第 26 期第1回委員会の議事要旨(既に承認済み)を確認した。(資料2 参照)

また、第2回以降のメール審議の内容が確認された。(資料3 参照)

なお資料3の中の、第6回メール審議の内容において、デバイス・電子機器工学分科会の記載が漏れていた
ので修正された。

(2) 分科会、小委員会の立ち上げや委員追加について

分科会、小委員会の立ち上げ時の承認に係るプロセスについて、三瓶委員長から説明がなされた。(メモのみ)
委員の追加などはメール審議を有効に活用していくなどの方針が示された。

また、小委員会立ち上げについては、分科会が十分内容を吟味した上で、事務局経由で幹事会に申請することとするが、その内容については CC として親委員会役員に情報提供することが確認された。

(3) 分科会の活動報告

本委員会傘下にある3つの分科会の活動報告が行われ、その後、意見交換がなされた。

① 制御・パワー工学分科会:

第 25 期は、電気学会と連携した C.N.関連のシンポジウムを開催したことが報告された。シンポジウム後に、聴衆から自由意見を記載頂く形でアンケートを行い、まとめたものは電気学会 HP に公開し、学術会議にも報告している旨の説明があった。

今後、期を重ねる中で、順次、課題抽出や解決策を模索してはどうかという意見、一方、速度感を持つことも必要だという意見もあった。シンポジウム開催では学会との連携が有効であるものの、主催・共催などの手続きが煩雑だったとの報告に対し、学会・学術会議双方が主催となることが可能であるとの情報が提供された。

② デバイス・電気機器工学分科会:

今期は小委員会の立ち上げは行わず、分科会中心に活動する予定であるとの方針が示された。シンポジウム開催や意見の表出共に問題もあるが、シンポジウム開催には新たな発見もあったとの報告があった。敢えてビデオに残すなどのことをせず、自由に意見が言える形式でシンポジウムを開催したことで、ある種、「言いつばなし」だからこそその良い面もあったとの感想が寄せられた。

失われた 30 年を考えると、国内企業と TMSO など外資系の考え方のギャップの中に、今後の問題解決の鍵があるのではないかと意見があった。学術会議でどこまでやるかは、難しい面もあるとの意見もあった。

③ 通信・電子システム分科会:

第 25 期は見解を出したばかりであり、第 26 期は予定していない旨、報告された。今後は、問題点を掘り起こし、議論を進めていきたいとの方針が示された。提出した「見解」の利活用は、具体案には考えはないとのことであるが、例として、シンポジウムを開き、提出した「見解」をスタート点にして、問題点を知ってもらうことも考えられるし、授業に活用することも考えているとの説明があった。

日本は、技術の創出は上手くても全体ビジョンを描くことが不得意であり、失われた 30 年の反省に立って、今後、学術会議に何ができるかが課題であるとの問題意識を共有した。

(4) その他

- ①本委員会に、制御・パワー工学分科会委員長就任が承認されている大崎連携会員に参画頂くことを了承した。
- ②URSI 分科会委員長の八木谷連携会員に、本人の了解が得られた後、本委員会に参画頂くことを了承した。
- ③三瓶委員長から、8月の第三部会合が大阪で開催されること、次回の電気電子工学委員会は9月以降に開催される見込みであることのアナウンスがあった。

配布資料:

資料 1 電気電子工学委員会名簿

資料 2 電気電子工学委員会(第 26 期・第 1 回)議事要旨

資料 3 第 26 期電気電子工学委員会における第 2 回以降の審議内容

以上